江戸時代前期から中期における浄土真宗の庵室の平面構成

肥後藩における浄土真宗の庵室に関する研究 その2

CONSTRUCTION OF PLANE IN HERMIT'S CELLS OF THE SIN-SECT BUDDHISM
FROM THE EARLY TO MID-EDO PERIOD

A study on hermit's cells of the sin-sect buddhism in the Higo-clan No. 2

尾道建二*

Kenji ONOMICHI

Hermit's cell (ANSITSU) is the facility which was an official name of Buddhist temple was not recognized before the Buddhist temple was formed. Regardless of the presence of temple name acquisition, when the Statue of Buddha was not granted, the picture images of Buddha were hung on the inner wall of the worship in the "ANSITSU". The Buddhist altar and the inner sanctum did not exist. In the space of worship in the hermit's cell (ANSITSU) of the Shin sect of Buddhism that had a temple name of Buddhist acquisition and where the Statue of Buddha was already granted, a Buddhist altar did not exist, but a space for the inner sanctum to enshrine Statue of Buddha existed, and it was divided with a space for a priest and a believer to worship it definitely. The constitution of hermit's cell (ANSITSU) was the form that a Buddhist facility and a residence facility for the life of a priest unified, and it was extremely ANSITSU (hermit's cell) with an extreme district characteristic by a style of "FUTAMUNE-ZUKURI" that was a traditional house of the Higo area.

Keywords : Edo-period, SIN-sect, hermit's cells, plane, Higo-clan

江戸時代、浄土真宗、庵室、平面、肥後藩

1. はじめに

江戸時代の浄土真宗寺院は、開基後、本願寺から寺号と木佛が下付され、そして寺号公称が許されて寺院となるのが一般的であった。ところが、寺号公称が許される前の施設が寺院本堂に発展するには開基から数年から数百年の期間を要した。¹⁾そこで、本研究は、江戸時代において、開基から寺院本堂に発展するまでの期間に存在した浄土真宗の宗教施設を肥後藩の藩政史料を用いて明らかにしようとするものである。

ところで、江戸幕府は元禄5年(1692)の法令において、「庵室」の類が寺院本堂へ昇格するのを規制し、寺院昇格を控えた施設を「庵室」として取り扱った。²⁾前稿³⁾において、浄土真宗の「庵室」の形成について論じたが、本稿では、肥後藩における浄土真宗の「庵室」の平面構成を明らかにするものである。

本稿は前稿の結論を引き継いで論じるが、前項の論旨と結論は以下の通りである。

- ① 元禄5年(1692)の江戸幕府の法令に示されたように、「庵室」は寺院へ昇格する前、すなわち寺院本堂が成立する前の施設であり、事実、庵室が寺院へ昇格した事例があった。地方である肥後藩においても、元文5年(1740)と、文政6年(1823)から文政11年(1828)に実施された両寺院改に際して寺号の

無い施設を「庵室」として記録した。

- ② 肥後藩における「庵室」の形成は、寛永10年(1633)の『合志郡人畜改帳』に記録された坊主が居住する施設に設置された「持佛堂」の存在に始まった。宗教施設は「持佛堂」であり、享保13年(1728)には「阿弥陀堂」と呼ばれ、元文5年(1740)には「庵室」としての「阿弥陀堂」に変化した。
- ③ 享保13年(1728)の「阿弥陀堂」が農民の宅地内、あるいは農家に存在したように、「庵室」は寺院の造りではなく、一般信者の住居並みの作り、すなわち、農民や庶民の住居のような造りであり、内部は木佛ではなく、阿弥陀絵像を掲げていた。
- ④ 元文5年(1740)の「庵室」は「阿弥陀堂」を有し、寛永10年(1633)の「持佛堂」と同じように、僧侶である堂守が居住する施設を併設していた。
- ⑤ 元文5年(1740)の庵室である「阿弥陀堂」の規模は寛永10年(1633)の「持佛堂」の規模を引き継いだもので、梁間が2間の場合には、2間×3間、2間×4間、2間×5間であった。2間半の場合には2間半×4間、2間半×5間で、梁間が2間と2間半のいずれの場合においても奥行きは5間未満であった。
- ⑥ 寛永10年(1633)の「持佛堂」では、堂宇平面の短辺が2間と2間半であったが、元文5年(1740)の「庵室」である「阿

* 九州共立大学工学部建築学科 教授・工修

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu-Kyoritsu Univ., M. Eng.

弥陀堂」の梁間は、寺院本堂の梁間が3間以上であったのに対し2間と2間半であった。

上記の結論が寛永10年(1633)の『肥後藩人畜改帳』⁴⁾と元文5年(1740)の『荒尾手永寺社並古跡の庵室軒数地床改帳』⁵⁾の史料に基づいていることから、本稿では、寛永10年(1633)から元文5年(1740)までの庵室の平面構成を明らかにするものである。

2. 寺号と木佛が下付されていない庵室の構成

2-1 「義映」の庵室

『玉名郡小田手永寺院本末間数改帳』(文政6年・1823)⁶⁾に「義映」という庵室が記録されている。同改帳の記録によると、「義映」の庵室は玉名郡小田手永伊倉の熊本西光寺の下寺である来光寺の境内に所在する浄土真宗の庵室であった。同改帳には「一、庵室 佛間 式間 三間 茶間 式間 三間 勝手間 一間半 四間 (中略) 庵主 義映 萱葺」とあり、但し書きから、⁷⁾「義映」の庵室平面は寛政2年(1790)以前から存在していたことが判る。さらに、「右庵室元禄之此より寺内 有之、(中略) 義映唯今之庵主 而都合五代相続仕候」とあり、「義映」の庵室は元禄期(1688～1703)には既に存在しており、文政6年(1823)まで5代続けて相続したことが判る。ところで、同改帳の絵図面によると、「義映」の庵室は4間×4間半で、前面に縁、右手と背後に下屋と庇がある。「佛間」と記された平面が拝礼空間で2間×3間であった。2間×3間の平面は、寛永10年(1633)の『肥後藩人畜改帳』において、坊主が居住する施設に記録された「持佛堂」の規模と同じである。³⁾

ところで、『玉名郡小田手永寺院本末間数改帳』(文政6年・1823)の「義映」の庵室には木佛が記録されている。⁸⁾しかしながら、「佛間」には木佛を安置するための佛壇や内外陣の区画は無い。佛壇や内陣が無いことを考えると、「佛間」には建設当初から木佛が存在していたとは考えられず、木佛は庵室建設後に下付されたと推測される。この「義映」の佛間を考える上で次の記録が参照される。『寺社例帳』(寛文8年～宝暦5年・1668～1755)⁹⁾に元禄4年5月(1691)の「覚」が収録されており、「一、在中 而真宗坊主當時迄寺構を不仕在家並 而絵像の佛をかけ居候処 (後略)」とある。これは、浄土真宗の坊主が、寺院を作らずに、在家並、すなわち一般の住居と同じような作りで、絵像の佛を掛けていた、という元禄4年(1691)頃の坊主が居住する浄土真宗施設の実態を示している。このように、「義映」の庵室が元禄期(1688～1703)から存在していたこと、「義映」の庵室には木佛を安置するための佛壇や平面区画がないこと、そして元禄4年(1691)において寺号公称が許されていない坊主居住の浄土真宗の施設は阿弥陀の絵像を掲げていたという事実があったことなどを考えると、木佛が下付されておらず、しかも寺号公称も許されていない「義映」の庵室は、絵像の佛を掲げていたという元禄4年(1691)頃の庵室の平面を示していると言える。

「義映」の庵室は4間×4間半で、「佛間」、「茶間」、「勝手間」から構成されている。2間×3間である「佛間」の右手は2間×3間の「茶間」があり、「佛間」と「茶間」の奥は1間半×4間の「勝手間」で、土間であったと考えられる。「茶間」と「勝手間」は生活のための居住施設であるので、「義映」の庵室は「佛間」である宗教施設と生活のための居住施設が一体化した形式であった。(図-1)¹⁰⁾なお、「義映」の庵室は4間×4間半であるが、3間以上の梁が禁じられ

ていたことから、¹¹⁾3間以下の梁を組み合わせた小屋組みによる一棟の萱葺屋根であったと考えられる。「佛間」の前部は3尺3寸×2間の縁で、瓦葺の下屋であった。「茶間」の脇は5尺×4間半の萱葺下屋、そして、「勝手間」には1間×1間の竹瓦葺の下屋と、2尺8寸×3間の竹瓦庇の縁があり、¹²⁾下家の屋根材は瓦と萱と竹であるが、庵室の表は瓦、裏手には竹瓦が使われていた。

このように、「義映」の庵室は寺院の造りではなく、所在する地域の一般的な住居と同じ作りであったと考えられる。

図-1 「義映」の庵室平面図

2-2 「慈教」の庵室

文政7年(1824)の『下益城郡廻江手永村々氏神堂宇絵図』¹³⁾に「中山手永上安見村信行寺弟子 真宗 木原村 慈教」と書かれた庵室が記録されている。一方、『下益城郡誌草稿』(明治15年10月・1882)¹⁴⁾に光福寺が記録されている。この記録によると、光福寺は正徳5年(1715)に開基し、明治12年7月(1879)に寺号公称が許されている。¹⁵⁾「慈教」の庵室と光福寺の関係であるが、文政7年(1824)の『下益城郡廻江手永村々氏神堂宇絵図』には木原村所在の庵室や寺院が「慈教」以外に記録されていない。一方の『下益城郡誌草稿』(明治15年・1882)の木原村にも光福寺以外に寺院や庵室は記録されていない。さらに、光福寺は現在の熊本県下益城郡富合町木原に所在しているが、光福寺の現住職は第9世である。これらの事実を考え合わせると、「慈教」の庵室は光福寺の前身であることが判る。したがって、文政7年(1824)に「慈教」と記録された庵室の開基年代は正徳5年(1715)であり、明治12年(1879)に寺号公称が許されて光福寺に昇格したことが判る。

ところで、文政7年(1824)の絵図面(図-2)¹⁶⁾に、佛間脇の「下家」についての書付があり、¹⁷⁾この書付から、文政7年(1824)に記録された「慈教」の庵室は寛政3年(1791)以前ののものであることが判る。

「慈教」の庵室は、「佛間」、「居間」、「座敷」、「臺所」、「湯殿」から構成されている。「佛間」は2間×5間であるが、この2間×5間の平面は、前稿³⁾で明らかにした寛永10年(1633)の「持佛堂」や元文5年(1740)の「庵室」である「阿弥陀堂」と同じ2間×5間の規模である。したがって、開基が正徳5年(1715)であることを考えると、「慈教」の庵室は元文5年(1740)以前の、正徳5年(1715)頃の庵室平面を示していると考えられる。

「佛間」であるが、文政7年(1824)の改帳には木佛の記録は無く、佛壇や内外陣の区画もない。¹⁸⁾「佛間」に佛壇や、内外陣を示す区画がないことを考えると、建設当初から「佛間」に安置する木佛が存在していたとは考えられず、前項の「義映」の庵室と同じように、「慈教」の佛間も絵像の佛を掲げていたと考えられる。

「佛間」は2間×5間であるが、梁間も間口と同じ2間であったと考えられる。「佛間」に向かって右側には1間×5間の「下家」があり、一方の左側には幅6尺の「戸合」がある。「戸合」の奥行きは「佛間」と同じ5間で、外部とは区画されている。「下家」と「戸合」の違いはあるが、「佛間」の両側にはほぼ同じ幅と奥行きの平面が存在していたことが注目される。一方、縦一列に並んだ「居間」と「座敷」も梁間が2間、奥行きは5間であり、「臺所」は「居間」と「座敷」の棟からL型に張り出していたと考えられる。そうすると、「佛間」の棟は縦一列に並ぶ「居間」と「座敷」の棟と「戸合」を挟んで平行しており、L型とI型を組み合わせた屋根形態であったと考えられる。¹⁹⁾「慈教」の庵室は2つの棟が平行する屋根形態であるので、平行する2棟の屋根は「戸合」の位置で接することになり、この「戸合」には谷樋が架かっていたと考えられる。このように、2つの棟が平行する屋根形態は、現在の熊本市周辺地域に存続した肥後地方特有の「二棟造り」の民家と同じ形式であり、その分布と合致している。²⁰⁾「慈教」の庵室は宗教施設である「佛間」と居住施設が分棟した形式であるが、この形式は肥後地方特有の民家の形式であった。

「佛間」の前面であるが、「向拝 四尺二間」と記されている。向拝が増築されたことを示す書付けが絵図面に記されていないことから、向拝は増築されたのではなく、建設当初から存在していたと考えられる。したがって、正徳5年(1715)頃の庵室には既に向拝が存在していたと考えられる。

なお、「臺所」の奥に「湯殿」と「戸合」があるが、「湯殿」が家庭に普及するのは江戸時代中期頃であること、²¹⁾所在地が地方である肥後であることを考えると、当初は「湯殿」は存在しておらず、正徳5年(1715)以降に増設されたと考えられる。なお、「湯殿」に書付けや但し書きが無いことから寛政3年(1791)にはすでに増設されていたと考えられる。

図一2 「慈教」の庵室平面図

3、寺号取得であるが木佛が下付されていない庵室の構成

3-1「寛了庵」の庵室

『下益城郡中山手永寺社間敷並堂宇絵図』(文政6年・1823)に「中

村 寛了庵」と記された庵室の平面が記録されている。²²⁾一方、現在の熊本県下益城郡中央町大字中に所在する泰忠寺がある。この泰忠寺の記録によると「寛了」は第6世の住職で、泰忠寺の先代であったことが判る。²³⁾さらに、明治15年(1882)の『下益城郡誌草稿』¹⁴⁾にも泰忠寺が記録されている。この記録から「寛了庵」は寛永3年(1626)に開基し、明治12年(1879)に寺号公称が許されたことが判る。²³⁾

ところで、「寛了庵」の拝礼空間は絵図面に「御座 式間半五間エン付」と記され、前部に「竹底掘立五尺二間」と記された庇がある。向拝と思われる掘立の竹底の存在が注目されるが、この庇の書付から、²⁵⁾「寛了庵」の平面は寛政7年(1795)以前から存在していたことが判る。

2間半×5間の「御座」²⁶⁾であるが、2間半×5間の平面は寛永10年(1633)の『肥後藩人畜改帳』に記録された「持佛堂」、及び、元文5年(1740)の『荒尾手永寺社並古跡の庵室軒数地床改帳』⁵⁾に記録された「庵室」である「阿弥陀堂」と同じ規模である。³⁾

2間半×5間の「御座」は前から半間の位置で区画されているが、奥行きが半間であることと、前部であることから、この区画部分は縁であったと考えられる。「御座」にはこの区画以外に他の区画はなく、内陣や佛壇は存在しなかったと考えられる。文政6年(1823)の同改帳には木佛についての記録は無く、佛壇や内外陣の区画がないことを考えると、建設当初の「寛了庵」の「御座」には木佛は存在しておらず、絵像の佛を掲げていたと考えられる。

ところで、「寛了庵」は現在の泰忠寺の前身であるが、寛文5年から同9年(1665~1669)に書かれた『国郡一統志』²⁷⁾に「中村 泰中寺 阿弥陀」とある。「忠」と「中」の書き違いと思われるが、所在地と寺院名の読みが同一であることを考えると、『国郡一統志』に記された泰中寺は現在の泰忠寺のことと思われる。したがって、泰忠寺、すなわち「寛了庵」の前身である施設は寛文5年から同9年(1665~1669)には、未だ寺号公称は許されていないが、「泰忠寺」の寺号を取得していた可能性がある。²⁸⁾このように寺号をすでに取得していた施設の実態を示す史料に享保13年(1728)の『新編肥後国誌草稿』²⁹⁾がある。この中に「天文十年上京本願寺ヨリ阿弥陀絵像ノ裏書ニ西福寺ト云ル寺号ヲ免許アリテ彼道法子孫祇用田中村義圓ト云ル僧彼絵像ヲ安置セリ」とある。³⁰⁾この記録から、寺号の免許は受けているが寺号公称が許されていない施設では、木佛ではなく絵像の佛を安置していたという天文10年(1541)から享保13年(1728)にかけての庵室の実態を知ることができる。したがって、「寛了庵」の佛間平面は少なくとも、享保13年(1728)、あるいは享保13年(1728)より以前の庵室平面を示していると言えよう。

庵室の構成であるが、「寛了庵」は「御座」、「居間」、「庭屋」、「部屋」から構成されている。「御座」の名称は寛永10年(1633)の『肥後藩人畜改帳』に記された農民の住居においてもしばしば見られる部屋の名称である。そして、「庭屋」は「釜屋」と同じであるから、同改帳に記録された「持佛堂」を有する坊主居住の住居は、「うまや(うしや)が別棟であったと考え、基本的には「持佛堂」を含めて、「本屋」(本家)、「かまや」、「へや」、で構成されており、「寛了庵」の平面構成は寛永10年(1633)の『肥後藩人畜改帳』に記された「持佛堂」を有する坊主居住の住居の平面構成と同じであることが判る。

各部屋の構成であるが、宗教施設である2間半×5間の「御座」の横には「戸合」がある。「戸合」の寸法は記されていないが、「御座」は「戸合」を挟んで2間半×5間の「居間」と接している。「居間」の前部で「御座」とは逆方向に「庭屋」が張り出し、後部においても同様に「部屋」が張り出ている。「居間」からそれぞれ張り出した「庭屋」と「部屋」の間には別の「戸合」がある。「御座」が宗

図-3 「寛了庵」の庵室平面図

教施設であったのに対しこれらの部屋は居住施設であった。「御座」と「居間」の間の「戸合」は外部と区画されているので、宗教施設である「御座」は居住施設と完全に分離独立しているのではなく、「戸合」を挟んで居住施設と一体化している。さらに、「寛了庵」の「御座」の梁間は間口と同じ2間半であったと考えられるが、同様に、「戸合」を挟んだ「居間」の梁間も2間半で奥行きが5間であったと考えられる。そうすると、「寛了庵」の屋根形態は複雑に見えるが、¹⁹⁾「御座」と「居間」は前項で示した「慈教」の庵室と同じように、基本的には「戸合」を挟んで奥行きが5間である2つの棟が平行した形態である。2つの屋根は「戸合」の部分で接しており、「戸合」には谷樋が架かっていたと考えられる。この形式は現在の熊本市周辺地域に存在した「二棟造り」の民家と同じ形式であり、その分布と合致している。²⁰⁾

「御座」の拝礼空間の周囲であるが、右手に庇があり、この庇は背後から「戸合」に廻っている。「戸合」や前部の縁を含めると「寛了庵」の「御座」の平面は四方に縁と庇が廻った形式で、右手奥から背後に廻る庇はやや広めの庇であった。一方、「部屋」の奥に「湯殿」があるが、この「湯殿」も前項の「慈教」の庵室と同じように、当初は存在していなかった可能性がある。

4. 寺号と木佛が下付されている庵室の構成

4-1 「阿弥陀堂」の庵室

文政6年(1823)の『合志郡大津手永本末間数御改帳』³¹⁾に大津手永入道水村に所在する「一、阿弥陀堂 古来安福寺と申候儀」と記された堂宇が記録されている。³²⁾この「阿弥陀堂」は寺院名ではなく「阿弥陀堂」と記録されていることから、寺号公称が認められていない庵室であった。同改帳によると、「阿弥陀堂」には木佛が存在しており、この木佛には慶長4年(1599)に彩色された記録

と、安福寺の寺号が記されていた。³³⁾

この「阿弥陀堂」の平面構成は「本堂」、「堂守家」、「薪小屋」で構成されている。「阿弥陀堂」の拝礼空間は寺号公称が認められていなかったにもかかわらず、同改帳には「本堂」と記されている。「本堂」の平面は葦葺の2間×3間で、前方に3尺×2間の板縁が付いていた。但し書きから、³⁴⁾文政6年(1823)に記された「阿弥陀堂」の平面は寛政3年(1791)以前から存在していたことが判る。

「阿弥陀堂」の「本堂」は2間×3間で、2間×3間の平面は寛永10年(1633)の「持佛堂」や、元文5年(1740)の「庵室」である阿弥陀堂と同じ規模である。³⁾また「阿弥陀堂」という堂宇名称も享保13年(1728)の『新編肥後国誌草稿』や、元文5年(1740)の『荒尾手永寺社並古跡の庵室軒数地床改帳』に記録されている。さらに、「本堂」の横に板敷の「戸間イ」を挟んで「堂守家」があるが、「堂守」の名称も元文5年(1740)の『荒尾手永寺社並古跡の庵室軒数地床改帳』の庵室に記録されている。³⁵⁾文政6年(1823)の改帳には「無住」と記されてはいるが、「堂守家」の存在は、かつては「阿弥陀堂」に堂守である僧侶が居住していたことを示している。

「本堂」は2間×3間であるが、内部は、表から2間の位置で2間×2間と2間×1間の平面に区画されている。先に述べたように、「阿弥陀堂」には慶長4年(1599)に彩色された木佛が既に存在しており、この木佛の存在を考えると、本堂奥の2間×1間の平面はこの木佛を安置するための平面であったと考えられる。したがって、拝礼空間は木佛を安置した内陣と信者が拝礼するための外陣に明確に区分されていたことが判る。なお、木佛を安置する内陣には佛壇は存在していなかった。

ところで、前項、2-1の「義映」の項で一部述べているが、元禄4年5月(1691)の「覚」に「一、在中^ニ而真宗坊主當時迄寺構を不仕在家並^ニ而絵像の佛をかけ居候処本寺へ罷登本願寺^ニ而木佛を請候得共右之木佛^ニ寺号を添被出候左候而も寺を立右之寺号をと^ニなへ申儀者難成儀^ニ御座候哉之事」とある。これは、真宗坊主が寺院を造らずに在家並みの建物で絵像の佛を掛けていたが、本願寺に詣でて木佛をお願いし、その木佛に寺号を添えて出されたので、寺を建てて、木佛に書かれた寺号を公称して良いか、との伺いに対しては、それは難しいとする元禄4年(1691)頃の寺院昇格の許認可についてのやり取りを示している。このように、入道水村に所在した「阿弥陀堂」の存在と、安置された木佛に寺号が書かれていた事実は、元禄4年(1691)頃において、坊主が居住する施設で、しかも既に、寺号を記した木佛を下付されているが、未だ寺号公称が許されていない施設が寺号公称の許可を得て寺院へ昇格したいという庵室の存在を示しているとともに、元禄5年(1692)の江戸幕府の法令²⁾の背景と実態を裏付けていることが判る。したがって、大津手永入道水村に所在する「阿弥陀堂」は元禄4年(1691)頃の庵室平面を示していると言えよう。しかも、寺号と木佛が既に下付されている庵室の拝礼空間は、木佛を安置するための内陣と、信者が拝礼するための外陣に区分されていたことを示している。

「堂守家」の平面は2間半×5間で、表から1間半、2間、1間半のそれぞれの位置で3分割されている。3分割された「堂守家」内部の部屋名は記されていない。しかしながら、『合志郡大津手永本末間数御改帳』(文政6年・1823)に記録された図面(図-4)に堂守家の前方脇に「湯殿」があることを考えると、「湯殿」と隣接する手

前の区画は土間であり、「かまや」(釜屋)であったと考えられる。なお、この「湯殿」は、同改帳の記録から、³⁶⁾寛政3年(1791)以前は存在していなかった。

ところで、寛永10年(1633)の『肥後藩人畜改帳』に記録された坊主が居住する住居は、基本的には宗教施設(持佛堂)に加え、「本屋」(本家)、「かまや」、「へや」、「うまや」(うしや)で構成されている。³⁾「本屋」(本家)、「かまや」、「へや」、「うまや」(うしや)は『肥後藩人畜改帳』に記録された庶民(農民)の住居にも記録されており、「本屋」(本家)と他の「かまや」、「へや」等の関係から、「本屋」(本家)は主屋ではなく、「へや」などと同等の一区画と考えられる。³⁷⁾「堂守家」は手前が「かまや」であるので、「うまや」(うしや)を除くと、「堂守家」の3分割された部屋は、手前から、「かまや」、「本屋」(本家)、「へや」であったと考えられる。したがって、「阿弥陀堂」の堂守家の平面構成は『肥後藩人畜改帳』に記録されている坊主居住の住居の平面構成を示していると考えられる。なお、「薪小屋」は別棟で、7尺×2間半の萱葺であった。

「本堂」と「堂守家」との間であるが、1間×2間半の「戸間イ」を挟んでいる。「本堂」と「堂守家」は別棟で、「本堂」の2間×3間の堂宇には2間梁、「堂守家」の2間半×5間の建物には2間半の梁がそれぞれ架けられていたと考えられる。「本堂」と「堂守家」は板敷の「戸間イ」を挟んで並行する2つの棟から構成された屋根形態で、両棟の屋根は「戸間イ板敷」の位置で接している。そうすると、「戸間イ板敷」には谷樋が架けられていたと考えられる。このような屋根形態は肥後地方、すなわち現在の熊本市周辺地域に分布していた「二棟造り」の民家と同じ形式であり、その分布と合致している。²⁰⁾「阿弥陀堂」と記録された庵室は宗教施設である「佛間」と居住施設が分棟した形式であるが、この形式は肥後特有の「二棟造り」の民家の形式で、地方的な特色を持つ住居の形式であった。

図-4 「阿弥陀堂」の庵室平面図

5. 結論

江戸時代の浄土真宗寺院は開基した後には本願寺から寺号と木佛が下付され、そして寺号公称が許されて寺院に昇格するのが一般的であったが、寺院昇格を控えた施設を江戸幕府は元禄5年(1692)の法令で「庵室」として取り扱った。

肥後藩における浄土真宗の「庵室」の形成は、寛永10年(1633)の坊主が居住する施設と、そこに設置された「持佛堂」の存在に始

まるが、宗教施設の呼称は享保13年(1728)には「阿弥陀堂」に、元文5年(1740)には「庵室」の宗教施設としての「阿弥陀堂」に変化した。

元文5年(1740)の浄土真宗の庵室である「阿弥陀堂」の規模は寛永10年(1633)の坊主が居住する施設に設置された「持佛堂」の規模を引き継いだもので、梁間が2間の場合には、2間×3間、2間×4間、2間×5間で、2間半の場合には2間半×4間、2間半×5間であった。梁間が2間と2間半のいずれの場合においても奥行きは5間以下であった。

寛永10年(1633)以降、元文5年(1740)頃までは浄土真宗の庵室は宗教施設と「堂守」である僧侶の居住施設で構成されていた。庵室は宗教施設と居住施設が一棟の平面に納まったものと、宗教施設と居住施設が「戸合」や「戸間イ」を挟んだ形式のものがあった。宗教施設と居住施設が一棟の平面に納まったものは寺院の造りではなく、所在する地域の一般的な住居と同じ作りであったと考えられる。宗教施設と居住施設が「戸合」や「戸間イ」を挟む形式の庵室は平行する二棟の屋根によって形成された肥後地方の「二棟造り」の民家の形式で、地方的特色を示す民家の形式であった。

元禄4年(1691)から享保13年(1728)頃までの浄土真宗の庵室における拝礼空間は、寺号取得の有無にかかわらず、木佛が下付されていない場合、「佛間」、あるいは「御座」とされ、佛壇や内陣は無く、奥に阿弥陀絵像の佛を掲げていた。

寺号と木佛がすでに下付された庵室の拝礼空間は「本堂」とされ、木佛を安置するための内陣が存在し、内陣と外陣が明確に区分されていた。この場合にも庵室の拝礼空間には佛壇は存在しなかった。

庵室における「堂守」と呼ばれる僧侶の居住施設は元禄4年(1691)頃は「本屋」(本家・茶間)、「かまや」(勝手間)、「へや」で構成されていたが、居住施設の平面構成は寛永10年(1633)頃と同じ構成であったと推測される。

元禄4年(1691)から享保13年(1728)までの庵室の屋根は萱葺きで、庇の一部や向拝には竹瓦が使われていた。元禄年間(1688~1703)の庵室には「向拝」は存在しないが、享保13年(1728)の庵室には掘立の竹庇による向拝が存在した。

【注】

- 1) 拙稿:『寺社旧記にみる寺号取得以前の真宗の宗教施設について』生活文化史第44号(平成15年9月)日本生活文化史学会に示している。寛保2年(1742)の毛利家文書『寺社旧記』により、開基から寺号取得までの年数が判明したのは70寺院であるが、この中で、開基年代と寺号取得年代が同じであるものは2寺院だけであった。開基から寺号取得までの年数が31~40年のものが最も多く6寺院、続いて、91~100年と101~120年がそれぞれ5寺院で多い。200年を超えた寺院も3寺院あった。100年以上の寺院は33あり、おおよそ半数を占める。ただし、ここで寺号取得年代としているのは、寺号公称が許された年代のことである。
- 2) 『新地の寺院地の寺院取計之覚』(元禄5年7月 1692.7)に「覚 只今迄有来新地之寺院ハ御赦免之、向後古跡同意ニ被仰出、自今以後新地之寺院堅御停止之旨被仰出候、但、只今迄ハ新地寺院之内、最早段々潰候分再興之儀、並庵室之類寺院ニ取立候儀ハ彌以堅停止之間、可被得其意候、右之趣、只今急度在々江被相觸候ニハ不及候、面々書面之趣被相心得、被仰出ニ相違さざる様ニ、可有御仕置候以上、七月 引番 大成令」とある。この覚は『徳川禁令考 前集第五 第四十五章寺院法度』司法省蔵版法制史学会編石井良助校訂創文社p24に編纂されている。
- 3) 拙稿:『江戸時代前期から中期にかけての浄土真宗の庵室の形成(肥後藩における浄土真宗の庵室に関する研究 その1)』日本建築学会計画系論文集 No. 581 (2004年7月)
- 4) 『肥後藩人畜改帳』寛永10年(1633) 熊本県立図書館所蔵

- 5) 『荒尾手永寺社並古跡の庵室軒数地床改帳』元文5年(1740) 熊本県立図書館所蔵 廃藩置県に際し、肥後藩から熊本県に引き継がれた文書で、元文5年(1740)の寺社改の記録である。
- 6) 『玉名郡小田手永寺院本末間数改帳』文政6年(1823) 熊本大学付属図書館寄託「永青文庫」この改帳は2冊から成る。両史料とも表紙が欠落しているが、2冊目の巻尾に「文政六年七月」と記されている。
- 7) 「但し書き」とは「本末間数改帳」に記録された文書の中で、平面の用途別に平面の寸法等が記述された後に、「但・・・」と寛政期の寺院改時の平面と比較、あるいは増築等が記述されたものである。ここでは「但寛政二年御改之節者佛間式間五間茶ノ間式間四間左右三尺四間庇付と書上置申候得者書上達と相見有姿本行之通御座候」とある。寛政2年(1790)の御改の際の記録は「書上達」、すなわち「誤り」とされ、寛政2年(1790)の寺院改めの際の平面は本行の通り、すなわち、文政6年(1823)の平面と同じと書かれている。したがって、文政6年(1823)に記録された平面は寛政2年(1790)以前から存在していたことが判る。
- 8) 「本尊彌陀木佛立像高サ壹尺三寸」とある。
- 9) 『寺社例帳』熊本県立図書館所蔵、「堂舎間取之事寛文八年二月従公儀御定之御書出写」という江戸幕府の「触」が巻頭に記してある。寛文8年～宝暦5年(1668～1755)の肥後藩の行政文書の中から寺社に関する事項を集め、寺社行政の判例記録として編纂されたもの。
- 10) この図は『玉名郡小田手永寺院本末間数改帳』(熊本大学付属図書館寄託「永青文庫」)の絵図面を正確に書き写したものである。
- 11) 寛文8年2月の「覚」に寺院について「一、梁行き京間三間を限へし 但桁行ハ心次第たるへし」とある。
- 12) 『玉名郡小田手永寺院本末間数改帳』(文政6年・1823)の記録文書には以下のように記録されている。

一、庵室 佛間式間三間 五尺四間半 下屋萱葺 庵主
茶間式間三間 茶間三間 下屋竹瓦葺 義映
勝手間茶間三間 式尺八寸三間 竹瓦庇縁 萱葺
三尺三寸 式間 下屋縁瓦

この記録から、佛間の前は下屋の縁で瓦、「一間 一間 下屋」は竹瓦葺であったことが判る。なお、「茶間」前部の「三尺二間縁」は記述がないので濡縁であった可能性がある。

- 13) 『下益城郡廻江手永村々氏神堂宇絵図』文政6年(1823年) 熊本大学付属図書館寄託「永青文庫」この改帳の表題、「氏神堂宇絵図」の部分に縁が引かれ、「小神社仏閣御改図面」と書き変えてある。この改帳は絵図面だけで由緒等の記録は無い。
- 14) 『下益城郡誌草稿』明治12年7月(1882.7) 熊本県立図書館所蔵「郡村誌」と称され、各郡別に編纂されている。廃藩置県後、熊本県が実施した最初の記録である。
- 15) 「真宗西京西本願寺ノ末派ナリ村ノ中央ニアリ正徳五年中乙未僧了圓開基光福庵ト称シ熊本順正寺ノ末庵タリ明治十二年七月寺号公称創建大同十三年四月本山直末トナル」とある。
- 16) この図は『下益城郡廻江手永村々氏神堂宇絵図』(文政7年・1824)の絵図面を正確に書き写したものである。図面の間仕切り線上の・(黒丸)は必ずしも柱とは限らない。これは図-3、図-4も同じで、正確に記録する為に、作図上の寸法の目安として付けられた可能性がある。
- 17) 「書付」とは絵図面に書き込まれているもので、中には短冊様の紙が添付されている場合もある。ここでは、「寛政年中御改之節下家一間五間と書上図面之通御座候」とある。「寛政年中御改」は寛政3年(1791)に実施されている。
- 18) 『下益城郡廻江手永村々氏神堂宇絵図』では、佛間に内陣が存在する場合には、佛間内部に境界線が引かれ、平面奥に「内陣」と記されている。したがって、「慈教」の庵室には内陣や仏壇は存在しない。
- 19) 『宝暦新町絵図』宝暦13年(1763) 熊本県鹿本郡鹿本町来民、大光寺所蔵 この絵図には肥後藩山鹿郡中村手永新町の町並みが描かれているが、平行した屋根を基本に棟が複雑に組み合わさった民家が数多く描かれている。
- 20) 『昭和45年度 熊本県民家緊急調査報告書』昭和46年 熊本県教育委員会、及び『九州民家一覽表及び分布図』昭和52年(日本建築学会九州支部歴史・意匠委員会)に「二棟造り」の分布が示されている。これによると、現在の熊本市近隣の甲佐、菊池の地域に分布しており、廻江手永、中山手永は甲佐の近隣で、入道水も菊池に近い地域である。
- 21) 『建築もののはじめ考』昭和48年 大阪建設業協会編 新建築社 p194 「風呂の歴史」：川島宙次著に「江戸中期頃から漸次湯湯浴に改良せられたが、この頃になると家庭にも掘え風呂が普及して」とある。
- 22) 『下益城郡中山手永寺社間数並堂宇絵図』文政6年(1823) 熊本大学付属図書館寄託「永青文庫」所蔵
- 23) 現在の泰忠寺(熊本県下益城郡中央町中)の過去帳に歴代の住職名と戒

名等が記録されている。

- 24) 「寛永3年丙寅2月僧西善創建(中略)明治12年7月寺号公称許可」とある。
- 25) 「此竹底前々より御座候処寛政七年御改之節書上洩而申候」とある。
- 26) 「御座」については、『肥後藩人畜改帳』(寛永10年・1633 熊本県立図書館所蔵)では、記録された農民の住居の部屋名に「おさ」、あるいは「おさ」、「をさ」、「こさ」と記されている。
- 27) 『国郡一統志』寛文9年(1669) 熊本県立図書館所蔵
- 28) 次に述べる「西福寺」は以前は隣村の下田に所在していたが、『国郡一統志』の下田村には「西福寺」の寺号を取得していたにもかかわらず、「阿弥陀」と記されている施設が存在していることから泰忠寺の寺号取得の確実性が伺える。なお、『国郡一統志』の田中村の項は記述のない空白で、「阿弥陀」などの記録はない。
- 29) 『新編肥後国誌草稿』享保13年(1728)成瀬久敬著 肥後領内を手永毎に村名、村高、社寺、港、名所について記録したものである。『新編肥後国誌草稿』は写本が存在するが、著者は、「熊本県立大学本」と「九州大学本」を照合し、記述内容に相違ないことを確認した。なお、「九州大学本」は一部の地域のものが欠落している。
- 30) 「西福寺」と伝えられる「義園」の堂宇は『益郡低用寺永寺社間数御改絵図面帳』(文政11年・1828 熊本大学付属図書館「永青文庫」)では庵室「壘道」で記録されている。現在、同地に所在する「西福寺」の歴代の住職は寺伝と墓石によると、「壘道」は8世、享保13年(1728)の『新編肥後国誌草稿』に記されている「義園」は5世である。
- 31) 熊本大学付属図書館寄託「永青文庫」この改帳の表題は正確には『文政六年九月 合志郡大津手永 天台宗 禪宗 浄土宗 浄土真宗 本末並堂間数由緒等 縁起 御改帳』と記されている。
- 32) 文政6年(1823)に「阿弥陀堂」として記録された庵室が発展して寺院に昇格したと思われる寺院や、他の宗派の寺院など、寺院の類は現在の熊本県菊陽町入道水地区には一切存在していない。
- 33) 文政6年(1823)の『合志郡大津手永本末間数御改帳』に「右阿弥陀堂之儀本尊聖徳太子作と申伝本尊之裏慶長四年二月古庄玄番彩色寺号安福寺と書立候」とあり、慶長4年2月(1599)に古庄玄番によって彩色されたことが判る。改帳には宗派は記載されていない。また、この木佛の裏書に「聖徳太子作と申伝」と記されているが、聖徳太子作については真偽の疑いがあるが、聖徳太子の名を伝えていることから、この「阿弥陀堂」は浄土真宗との関わりを示している。聖徳太子との関わりについては、親鸞が聖徳太子の示現を受けて法然の門下に入ったとされ、親鸞の孫知信の墓所である茨城県久慈郡大町の浄土真宗法龍寺には聖徳太子像が祀られている。木佛が「聖徳太子作」と伝えているのは他に熊本県下益城郡富合町の光品寺などがある。
- 34) 「但寛政三年御改帳者式間式間半と書上置此節改前右之通而寛政三年御改之節書上達ひと相見但縁縁之儀以前より有来候得者は又其節書上洩れと相見申候」とある。
- 35) 『荒尾手永寺社並古跡の庵室軒数地床改帳』(元文5年・1740)では寺院は「住持」とされ、庵室は「阿弥陀堂」の記述の中で「堂守」と記され、各庵室には「堂守」の名前が記録されている。
- 36) 記録には「(前略) 尤湯殿之儀者其後無願而差付申候」とある。
- 37) 『肥後藩人畜改帳』に記録されている合志郡の多くの町村では、坊主が居住する住居のみならず、庶民(農民)の住居においても「本屋」が記録されている。しかしながら、合志郡の一部の町村では「本屋」(本家)は記録されておらず、「いや」、「い屋」が記録されている。「いや」、「い屋」が記録されている住居では「本屋」(本家)は記録されていない。同様に、玉名郡の『人畜改帳』でも「本屋」の記録はなく「居屋」と記されている。住居構成を考えると、「本屋」(本家)と「いや」、「い屋」、「居屋」は同じ用途であると考えられる。さらに、『肥後藩人畜改帳』では「居間」、「茶の間」などの名称は用いられていない。したがって、「い屋」、「居屋」の名称を考えると「い屋」、「居屋」は「居間」、「茶の間」などの用途と同じであり、「本屋」(本家)も同じ用途であったと考えられる。したがって、「本屋」は主屋という意味よりも、「居間」、あるいは「茶の間」として住居の中心という意味で、他の「へや」や「へ屋」と同等の一区画を示していると考えられる。

(2004年5月10日原稿受理、2004年9月3日採用決定)